

農学はいま、持続可能な社会の実現に欠かせない実践学となっています。ここではインタビューを通じて、農学生命科学研究科に学ぶ現役学生と、弥生キャンパスを巣立った先輩たちのいまをご紹介します。

## ON THE CAMPUS



河原 未来 Miku Kawahara

魚病学研究室 2017年修士課程進学

実は駒場時代は文系でした。でも、幼い頃は水族館の飼育員になりたかったくらいで、ずっと生物には興味がありました。水圏生物学を専攻したのは、結局、自分の中にある好奇心の原点に戻ったという感じです。現在、研究室では、ホタテガイの病気の研究に携わっています。魚類に比べて貝類の病気を研究する学者は世界的にも少なく、解明されていないこともたくさんあります。それだけにやりがいはあるし、水産試験場や漁業協同組合等に出向いて養殖の現場にいる方たちと接することは、自分の研究が社会から必要とされているのだという使命感にもつながっています。まさに実学ならではの面白さと言えるでしょうか。中学から大学まで10年間陸上の中距離をやっていたので、体力や忍耐力を要する作業は苦になりません。できれば研究者として社会に貢献できる道に進みたいと考えています。



中迎 菖平 Shohei Nakamukai

水圏天然物化学研究室 2017年修士課程進学

弥生キャンパスの長閑な雰囲気も、農学部自由闊達な研究環境も素晴らしいですね。しかも、今の研究室は研究対象であるカイメンを深海から獲るために航海にも出ます。室内実験だけでなく、こうしたフィールドワークも魅力です。海の近くで育ったこともあり、子どもの頃から貝殻の収集が好きでした。小学校の自由研究で標本を作った際、名前の分からない貝について調べるために郷土資料館に行きました。ここで貝に詳しい学芸員の方に出会い、それが水産関連の仕事に就きたいと思ったきっかけです。すでに学芸員の資格も取得しましたが、今は研究の道に進みたいと考えています。海洋のカイメンに由来する化合物の一部が医薬品として利用されています。しかし、まだまだ未開拓な素材。いつか海洋資源の未来を変える大発見をしたいし、そのワクワク感や期待感が研究の原動力です。

実学ならではの面白さと醍醐味

魚の性行動の仕組みを解明する

挑戦することの充実感がここに

なぜ水圏生物学を選んだの？

Why have you chosen Department of Aquatic Bioscience?

海洋資源の未来を変えたい

長閑な雰囲気と自由闊達な研究環境



宮副 大地 Daichi Miyazoe

水族生理学研究室 2017年修士課程進学

将来の選択肢として教師か研究者かの2つを考えています。教師に憧れるのは私をやる気にさせ、東大合格へと導いてくれたのも、生物部で研究や実験の面白さを教えてくれたのも、当時の先生方だからです。あのとき、東大を目指して努力していなかったら、今とは全く違う人間になっていた気さえします。教えることの大切さを痛感させられました。どちらを選ぶか、結論は博士課程の3年間で出せばいいのかなと思っています。もともと川や海で魚を獲るのが好きで、小学生の頃には川魚を水槽で飼っていました。その頃から水産学部系を目指していたので、東大入学後、農学部を選択したのは自然な成り行きでした。現在は魚の性行動の研究をしており、博士課程を終えるまでには「これをやったぞ!」という成果を挙げたいですね。考えてみれば、研究も受験も挑戦することの充実感においては同じなのかもしれません。

詳しくは、東京大学 大学院農学生命科学研究科 水圏生物学専攻 <http://www.a.u-tokyo.ac.jp>

## IN THE SOCIETY

卒業生人名録 03

# 農学は未来を変える超複合領域

イノベーションの最前線へ

株式会社リバネス代表取締役CEO 丸 幸弘

人生の転機を教えてください。予備校で受けた生物学の授業でのことでした。先生は受精卵が細胞分裂を繰り返しながら人の身体を形成していくプロセスを説明した最後に、「実はなぜこうなるかは分かっていないんだよ」と言うわけです。「えっ」と思うと同時に「世の中には分かってないことが多いんだ」という事実が新鮮で、生命科学の世界に惹かれました。大学は日本で初めて生命科学部を創設した東京薬科大学へ、大学院はさらに学問を究めるために東京大学に進みました。



約70名の社員のほとんどは修士・博士の理系の人材です。その数は今後さらに増えるでしょう。

教育以外の事業内容は？

たとえば、中高生に「何をしている会社ですか」と聞かれたら、「地球の課題を解決し、世界を変えようとしている会社です」と答えています。地球上には環境問題、食糧問題、エネルギー問題など様々な課

大学院時代に会社を創立されました。

おりしも「理科離れ」や「ポスドク問題」（博士号取得者の就職難）が起きた時期でした。研究者が研究者として働かず、その一方で、子どもたちの理科離れにより、将来は研究者が激減するかもしれない。これは危うい状況だと考え、まず理科離れを解決するために、大学院生15人が集まってベンチャー企業を立ち上げました。それがリバネスです。以来、今日まで小中高の学校に「科学実験教室」の出前授業をして最先端科学の面白さを伝えてきました。今年、小学校男子のになりたい職業の1位は「学者・博士」でしたが、ぼくらの活動も少なからず貢献しているはずですよ。

社員のほとんどは研究者だとか。

リバネスの理念は「科学技術の発展と地球貢献を実現する」。そのためには優れた研究者が集い、世の中に役立つ科学技術を生み出し、社会に橋渡すための場であればなりません。実際、



題がありますが、そこにつながる科学技術を抽出し、解決に向けての仕組みをつくれれば、そのプロセスで自然と研究者は集まってきます。こうしてリバネスは100以上のベンチャー企業を立ち上げたり支援したりしてきました。ミドリムシの力で食の未来を変えようとしている(株)ユーグレナや、日本初の大規模遺伝子検査ビジネスを行なう(株)ジーンクエストといった独創的なベンチャーはその一例です。



農学の未来をどう考えますか。

ぼくはこれからの社会を変えていくのは農学だと考えています。農業、林業、水産業だけでなく、生命科学から経済・経営まで、あらゆる分野を含む超複合領域であり、超異分野領域だからです。しかも食料は人類にとって最も欠かせないものです。つまり人類が生きている限り農業はなくなりません。今後、イノベーションの最前線を担うのはまちがいなく農学です。



リバネスの組織や人づくりへの取り組みは高く評価され、これまで数々の賞を受賞。また、多くの人に科学技術の可能性を伝えるために出版部門を設立。さまざまな書籍や冊子を発行している。

### PROFILE

丸 幸弘 Yukihiko Maru 1976年神奈川県生まれ。東京薬科大学卒業。東京大学大学院農学生命科学研究科博士課程修了。2002年に大学院生15人で株式会社リバネスを設立し、日本で初めて民間企業による先端科学の出前実験教室をスタート。研究者育成に力を入れるとともに、地球規模の課題を解決することを目標に、現在まで100社以上のベンチャー企業立ち上げに携わる。東京大学発のベンチャーとしては初めて東証一部に上場した株式会社ユーグレナの技術顧問も務める。

詳しくは、株式会社リバネス <https://lne.st/>